

これからの保育構造論構築に関する一考察

横松 友義 ・ 浅野 泰昌* ・ 近行あさみ* ・ 姚 金粧*

今日の環境を通しての教育において、保育全体を構造化しようとする保育構造論は、保育全体の中で今の実践がどう位置づくのかを理解する上で活かされると考えられる。この観点に立って保育構造論を構築しようとするとき、例外があることや作り直すものであることを前提にし、保育者の受けとめ方も考慮する必要がある。これらの点を踏まえた上で、保育実践構造論と保育内容構造論とに場合分けして活かし方について考察した上で、それぞれの構築を進めていく必要がある。特に、保育内容構造論については、カリキュラム等と共に、基本的な考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実現できるものを構築する必要がある。また、それを活用する保育者も、保育に関する知識と共に、人間として望ましい文化とか人の育ちの過程とかに関する知識を積み重ねていく必要がある。

Keywords：保育構造論，批判の分析と検討，保育実践構造論，保育内容構造論，論構築

1. 「環境を通しての教育」を充実させる上での保育構造論への注目

1980年代後半以降、環境を通しての教育、子どもの自発的活動への総合的指導が、わが国の保育の基本的考え方として確立されていく中で、保育全体を構造的にとらえる保育構造論は、あまり注目されなくなったといわれる。その理由として、例えば、日本の幼児教育方法史について研究を行ってきた田中は、1998年刊行の『幼児教育方法史研究』の中で、「構造論的視点では、子どもの生活や活動に保育者の一方的な立場から分断的に捉える傾向になる」¹⁾という主張を取り上げている。この主張には、保育者の視点から子どもの活動や保育をとらえていく見方では、環境を通しての教育は進めにくいという理解があるといえるであろう。

しかし、環境を通しての教育を行うことを基本的立場としながらも、保育構造論にも注目する研究者がいる。例えば、光本は、2000年の論文『『保育構造』論についての一考察』²⁾において次のように論じている。現在の幼稚園教育要領と保育所保育指針が改訂された際の特徴の一つとして、「保育者の役割および指導性を明確に位置付けようとしている

点」をあげることができる。「保育者の指導性の顕在化が志向される今日、保育を構造的に捉える視点について再考することは、保育者の指導技術の構築のための一助となるのではないかと考える。」こう論じた上で、彼女は、1960年代後半からのよく知られている保育構造論を再検討した上で、その後の保育構造論構築のあり方と保育構造論の存在意義について考察している。また、他方、前述の田中は、保育における構造的なとらえ方の必要性について次のように述べている。³⁾「1990年代以降、子どもの自発的な遊びを通じた総合的な教育が強調されたことによって、構造論は急速に消えていった。構造論的視点では、子どもの生活や活動に保育者の一方的な立場から分断的に捉える傾向になるというのがその理由である。果たしてそうだろうか。……子どもの生活がどのような質で周囲と関わりを持って成り立っているのか、保育者が重層的・構造的に捉えておくことは、子どもへの多様で豊かな指導を保証する上で、必要ではないだろうか。」

保育全体を構造的にとらえることは、保育者の役割や指導性を明確にすることにつながり、現実の保育所・幼稚園において豊かな指導をより確実に実現

する上で必要であると考えられる。今日、豊かな指導をより確実に実現する志向性が強まっているといえ、そのための理論的研究は、筆者らも重要であると考えられる。

そこで、本稿では、環境を通しての教育を行うことを基本的立場としながらも保育構造論の観点を再評価しようとする主張と、保育構造論に対する今日の批判とを再検討する。その上で、豊かな指導をより確実に実現するために、保育構造論の観点はどのように活かすことができるのか、また、活かされる保育構造論とはどのようなものなのかについて考察する。

2. 平成元年以降における保育構造論批判の分析と検討

ここでは、環境を通しての教育という考え方がわが国の幼稚園教育の基本として公表された平成元年以降を今日の教育観に基づく時期ととらえ、この時期における保育構造論批判を分析・検討する。今日の教育観に基づく時代に限定したのは、何をどのように育てるかについての基本的考え方が異なれば、当然批判の仕方も異なってくるからである。また、今日の主張は、今日的な研究水準のものであり、これから保育界で保育構造論についての考え方を構築する上で、研究対象として有効と考えられるからである。

1) 保育構造論という用語で意味される内容を分類することの必要性

まず、保育構造論という言葉の意味内容についてどのようにとらえられているかについて述べる。小川は、2004年刊行の日本教育方法学会編『現代教育方法事典』において、この点に関連して次のように述べている。「一般的には『幼児教育の構造』という言葉は、実践的には、幼稚園・保育所の区別なく、『保育内容の構造』という意味で使われる。言い換えれば、計画的に保育活動を展開するためには、幼児の発達特性や活動特性を考えてどのように保育内容を構成するかが問われることになる。」そう述べた上で、保育内容を生活と遊びに二分して構成する考え方、生活と遊びと課題に向かう活動ないし授業の三つに分けて構成する考え方を紹介している。⁴⁾この種の構造的とらえ方については、保育内容構造論と呼んだ方が意味を限定する上で適切と考えられる。

一方、光本のように、保育実践全体を構造的にとらえようとする保育構造論を問題にしている研究者もいる。⁵⁾保育実践全体を構造的にとらえようとする場合、保育の目標、内容、乳幼児の発達、周りの

環境、保育者の働きかけ等、保育にかかわることを構造的にとらえることが必要となる。この種の構造的とらえ方については、保育実践構造論と呼んだ方が意味を明確にする上で適切と考えられる。

保育構造論批判と言っても、保育内容構造論を批判する場合の論展開の仕方と保育実践構造論を批判する場合の論展開の仕方とは、当然異なってくるのが予想される。なぜなら、子ども、保育者、ねらい、環境等保育にかかわることを構造化していく場合の保育実践全体の構造化と保育のねらいやねらいを達成するための指導事項(願う活動内容)を構造化していく場合の保育内容の構造化とは、当然内容も異なってくるし、保育における活かし方も違ってくると思われるからである。こうしたことから、意味内容に応じて、保育内容構造論と保育実践構造論という言葉を使い分けて、批判を検討する必要があると考える。

このように意味内容を二つに分けて、それぞれの意味内容ごとになされている批判が妥当であるかどうかを分析・検討した研究は、国立国会図書館のNDL-OPACで平成元年以降刊行の雑誌記事に範囲を限定して検索を実施したが、見いだすことはできなかった。そこで、本稿では、最初に、諸批判を明確にした上で、保育実践構造論の場合と保育内容構造論の場合に分けて、再検討することにする。

2) 批判の分析

平成元年以降の保育構造論批判を明確にする。

田中は、前述のように、「構造的視点では、子どもの生活や活動に保育者の一方的な立場から断片的に捉える傾向になる」という主張を取り上げている。⁶⁾この主張は、保育構造論への批判ととらえることができる。

小川は、前掲書において、前述の保育内容を構造的にとらえようとする試みについて次のように述べている。「こうした試みは教育する側が自らの意図的計画的活動を明確に自覚したいという意味で、学校教育における教育課程や指導計画の考え方を強く反映しているといえる。それゆえ、そこでは、幼児の自主的遊びの活動の場は保障するけれども、幼児の成長発達にとって必要とされる生活にかかわる活動、大人が提供する文化に関する活動は、幼児に必要とされるものとしてきちんと位置づけるという考え方がみえる。それゆえ、これらの構造論は子どもたちに何を体験させたいかという点からの構造化であって、それらの内容が幼児たちにとってどのような意味をもつかといった点からのものではない。」⁷⁾ここでは、「子どもたちに何を体験させたいかという点からの構造化」である点が問題の核心となって

いるといえる。そして、この点から生じる保育内容の構造化について、次のように批判する。⁸⁾『『生活』と『遊び』を区別する必然はない。』「特に、遊びは……自主的な群が成立したり、自主的に何かをつくり出すことを学ぶ機会である。こうした遊びはさらに生活習慣のお片づけや、食事の準備などを自分たちのグループで自力でやる喜びとも結びついていく。」「子どもにとっては、なかでも3歳児などではごっこ遊びとお片づけは、区別できる活動ではない。」ここでは、理論が子どもの活動の実際に合っていない点が問題視されている。

田中の取り上げた批判と小川自身による批判は、子どもの視点からでなく大人の視点から構造化がされており、その結果、子ども自身の生活全体が適切にとらえられていなかったり、子どもの活動と合わなかったりするということである。そして、小川は「幼児教育の構造は上から（大人から）降ろすという発想ではなく、子どもから構成され直す必要がある」⁹⁾と主張する。ただし、こうした批判や主張については、保育実践構造論に対するものなのか、それとも、保育内容構造論に対するものなのかを明らかにする必要があるし、仮に保育内容構造論に対するものであることが明らかである場合でも、保育者のねらいや指導する事項（願う活動内容）を構造化する保育内容構造論に対して、妥当な批判であるかどうかを検討する必要があるといえるであろう。

3) 保育構造論の展開・衰退過程に関する歴史的とらえ方の分析

保育構造論に関する歴史的な研究として、小山の2002年の論文「幼児教育カリキュラムの史的展開—戦後わが国の『保育構造』論を中心に—」¹⁰⁾をあげることができる。ここでは、1960年代以降の保育構造論の展開・衰退過程に関する彼女のとらえ方を概説する。

小山の考えでは、保育の構造化は、学校教育の思想的影響を受けて推進された。「小・中学校等の学校教育では、1950年前後に起こった生活経験主義批判を受け、戦後数年間に実践された生活経験主義・生活単元学習から、教科内容と教育課程の系統的編成への転換が図られた。幼児教育でも当時の学校教育の思想的影響を受け、保育実践に教育課程の系統性の思想が持ち込まれ、『保育の系統性』や『保育の構造化』が鍵概念として用いられた。」「その際、幼児教育研究者は、教育内容配列や順序という概念を子どもの心身の発達段階や発達の道筋として捉え、子どもの発達段階をカリキュラムや指導計画の立案の基礎としながら保育内容の配列を考え、また、「保育者主導の『課業』や『仕事』などの設

定・一斉活動を、明確に位置づけたり重視する風潮にあった」。しかし、「1980年代以降、保育構造論の提案は、激減する。」「この保育構造論の衰退」について、小山は「構造論の限界と問題点が明らかにされたことと関連している」と考える。そして、「その問題点とは、一つには、構造論により保育の全体構造を把握することはできても、子ども一人ひとりの内面の育ちを読みとることができないこと、二つには、保育構造論の中にもみられるように、『仕事』や『課業』などの保育者側の意図的活動が強調されすぎたため、幼児教育の根幹となる『自由遊び』が疎かにされることに警鐘を鳴らす幼児教育関係者の意見があったことである。」この保育構造論の衰退と関連する議論として、彼女は、「『構造論は保育実践に役立つのか』といった構造論と保育実践との関連を問う議論」と「子どもの育ちのプロセスを検討するための方法を模索する議論」とをあげる。そして、次のように論じる。1990年代に、研究の中心は、「保育実践を検討するための子ども一人ひとりの育ちを読みとる保育カンファレンスや自由遊びにおける子どもの分析方法の検討」にとって代わられた。「つまり、幼児教育者の関心が、保育構造論にみられる保育理論や保育目標といった保育全体の枠組みへの関心から、保育者の自己の保育行為を検討する視点や検討方法へと移っていったのであり、そのことも、幼児教育内における保育構造論の衰退の要因といえるであろう。」

以上のことから、小山は、1960年代からの保育構造論の展開の歴史的意義について、「保育構造論の展開により、保育者に保育を見る際の様々な指標を提示し、よりよい保育内容を考えるという共通認識を幼児教育全体に与えたといえるであろう」と述べる。そして、「保育構造論は、保育実践者に保育をどう見るか、どのように検討するかといった視点をもたらし」と考えている。

小山は、子ども一人ひとりの育ちを読みとることができない点と自由遊び軽視に警鐘を鳴らす幼児教育関係者の意見があった点とを保育構造論の問題点ととらえている。このとらえ方も、田中が取り上げた批判や小川自身による批判のように、子どもの視点を重視する立場に立つものといえる。しかし、彼女の場合も、保育実践構造論と保育内容構造論とに場合分けして考察されたものではないといえる。

4) 今後の保育構造論構築のあり方に関する研究の分析

光本は、1960年代後半からの保育構造論を概観した上で、保育構造論の構築の仕方と存在意義について論じている。その際、1985年に公表された森

上史朗司会による藤野敬子及び吉村真理子との座談会記録「座談会 構造論は保育実践に役立つのか」¹¹⁾における議論に注目している。その中の、「保育実践を『保育構造』論に当てはめることにより、保育実践の多様な要素の読み取りが困難をきし、実践が硬直化する危険性を含んでいる」という主張を取り上げ、読み取れない要素は「子どもの育ちのプロセスと生命の躍動」という言葉で示されていると言う。そして、それを乗り越えるための課題という観点から資料内容をまとめると、「①実践者自身が崩しては組み替えられる『保育構造』。②保育者と子どもとの相互作用が読み取れる視点の構築についての提示がみられる。」と述べる。¹²⁾

この点に対して、光本は、「どのような視点で構造化するか、もっといえばどの課題の必然性に応えて、『保育構造』を作りあげるかによって、保育実践の見え方が異なってくる」という意味で、保育構造は、「子どもの実態—保育のねらい—カリキュラム作成—保育の実践—保育の分析といった実践のサイクルの各要素それぞれに位置づく」ことが必要ではないかと主張する。このことは、実践のサイクルの各要素での把握や設定や作成や実施や分析の場面ごとに、対応した保育構造の把握・活用が必要ということであろう。また、「実践現場において保育者の指導について考察する場合、保育者の指導とその他の要素との関連について、意図的に問題とされ検討されることは少ない。…それはその保育者の経験知にゆだねられていることが多いように思われる。」と述べた上で、「経験豊かな保育者」は、子どもと「どう関わるか」を「判断する」瞬間に、「保育を構造的に捉えかえしているといえるのではないだろうか」と論じる。その上で、次の結論に至る。「保育を構造的に捉えるという視点は、単に保育活動の成り立ちを重層的に捉えるということではなく、それぞれの要素が相互に力動的に作用することを提示し、保育実践活動における〈保育者の指導内容および方法〉と〈子どもの発達〉とを広角的に捉えていくことを含んでいる。その意味では、保育者の指導性の矮小化、保育者の指導と子どもの自主的活動との偏向をとどめる可能性を含んでいるといえよう。」¹³⁾

彼女の主張は、実践のサイクルの各要素ごとに対応した保育構造について考察することの必要性と保育における指導上の偏りを検討する上での保育構造論の存在意義とを指摘しているものといえる。

3. 保育構造論の衰退に関係すると考えられる座談会記録の再分析と再検討

保育構造論の展開・衰退過程に関する歴史的研究

を行った小山も、よく知られている保育構造論を分析・検討した上でこれからの保育構造論構築の仕方や存在意義について論じた光本も、前掲の1985年公表の藤野・森上・吉村による座談会記録「座談会 構造論は保育実践に役立つのか」に注目している。小山は、この記録を保育構造論衰退に関係した資料ととらえ、光本は、保育構造論構築上の課題について論じたものとして検討対象としている。現在の研究水準で、同資料は1960年代以降の保育構造論について研究する上で重要な資料と位置づけられているといえよう。そこで、本稿でも、同資料を再度分析・検討することにする。

同座談会記録に述べられている保育構造論への批判や保育構造論構築上の課題については、光本が概説している。その内容は、次のようにまとめてよかろう。保育実践を保育構造論に当てはめることにより、その中に含まれる子どもの育ちのプロセスや生命の躍動を示す多様な要素を読み取ることが困難になり、実践が硬直化する危険性がある。この点を乗り越えるためには、保育構造論を構築する際、①実践者自身が保育構造を崩しては組み替えられる性質と、②保育者と子どもの相互作用を読み取れる視点が含まれることが必要である。

筆者らは、光本が取り上げた部分以外に、同座談会記録において、どのような構造論が取り上げられているのか、構造論の存在意義はどのように論じられているのか、構造論に対してどのような批判がなされているのか、構造論構築上どのような課題があげられているのかを再分析し、その内容について再検討する。これまでの研究では、保育構造の意味内容によって場合分けして考察がなされていないので、詳細な考察はいまだできていない状況にあると考えられる。考察を詳細にすることを試みる。

取り上げられている構造については、二つあげることができる。

一つは、藤野の言う「人間のもっている伸びていく仕組み」という構造である。物的人的環境とのかかわりの中で子どもたちが自ら伸びていく構造といっておかろう。これを保育実践とのかかわりで言うと、保育実践の中で子どもたちが伸びていくプロセスの構造といえ、理論的には保育実践構造論の問題といえる。

今一つは、藤野の言う「上から与える教育内容の骨組み」という構造である。これは、理論的には保育内容構造論の問題といえる。この種の構造論の場合、教育（保育）内容が、教育（保育）者のねらいとか指導する事項とかを意味している場合、保育者側の願いを表すものである以上、全体として構造化

しようとするとき、子どもの相互作用や生命の躍動感や育っていくプロセスの詳細は、理論的に含まれないはずである。したがって、上から与える形と解釈されやすいが、そもそもそのような性質のものといえる。

保育内容構造論については、「カリキュラム等と共に、基本的考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実現できるかどうか」という点から検討する必要があると考える。ここでいう「基本的な考え方として」ということは、例外を認める、つまり、その保育内容の構造から離れる柔軟さも認めるということである。クーンのパラダイム論¹⁴⁾においても、パラダイムとは、一定の専門家集団に対して問い方や答え方の手本を示すものを意味するが、例外もあることを前提にしている。そのパラダイムを持つことが、基本的に問題解決上有効であるという考え方といってよいであろう。保育内容という用語の意味内容を踏まえた上で、保育内容構造論について検討する場合、パラダイム論と同様な観点から検討することが妥当ではないか。つまり、カリキュラム等と共に、その保育内容構造論を基本的考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実現できるかどうかを問うことが重要である。

保育構造論の存在意義の論じ方については、長年の保育実践経験を持つ吉村が、次のように論じている。「保育者は目の前の子どもの姿、現象といったものに目が行きやすい。生き生きとした姿とか熱中している姿、あるいは保育効果のような部分に、ほとんどすべてが注がれる傾向がありますからね。たとえば各種の月刊保育雑誌に出てくる実践などを読んでみますと、その活動でいかに子どもが生き生きと遊んだかが記されています。私はそれはとても大切なことだと思いますが、一方でその活動が保育の全体のかかわりの中で、どういう位置づけにあるのかというところが、乏しいと思うのです。」「構造論の効果は、そうした個々の活動が長い見通しの中でどういう時点にあるのか、または生活全体の中ではどんな位置を占めているのかを関連づけて考えることに気づかせてくれる点にあるのではないのでしょうか。」吉村は、保育構造論が存在すれば、長期的視野、生活全体の中での活動の位置づけを保育者が意識していける可能性について論じている。

保育構造論への批判については、言語によるモデル提示の限界に関するものをあげることができる。藤野は次のように論じる。「幼児教育の構造というのは、あくまでも、私たちが目にするのできない複雑怪奇な営みを、言語を使ってひとつのモデル

にしたものだと思うのです。そのことはとても意義のあることではあるのですが、あくまでもモデルにすぎず、そこから漏れるものはいくらでもあるわけです。……人間の成長や保育の営みの中にある未知の部分に刻々と目を開かれていく喜びがなければ、構造論も静的な枠組みとして実践を締めつけてしまうことになるでしょう。」この批判については、その構造論に、そこから漏れる部分への対応の仕方が含まれていれば問題ないということになる。

保育構造論構築の課題については、四つあげることができる。

一つは、長期的視野から保育で特に重視することを明らかにしていくことである。藤野は、「それぞれの活動が構造のどこにあてはまるかを考えていくのではなく」、「ライフサイクルから見た重点のかけ方、価値の選択が、これまでの構造論ではものたりないし、これからの幼児教育では必要になってくるでしょう」と言う。また、「大人の側の尺度を性急に持ち出さずに、もっと長いサイクルでとらえれば、それぞれの時期にゆったりと楽しむというか、生命の躍動と絡み合いのある生活の構造が見えてくるのではないかと思うのです。」とも述べる。つまり、子どものそれぞれの活動をすべて同じように位置づけるのではなくて、生涯とかの長期的視野から重視することを考えていくことを主張している。

今一つは、子どもの活動を正確に、あるいは、細やかにとらえることができるものにするのである。森上は次のように述べている。「たとえば遊びと基本的な生活、生活習慣にかかわる活動などは、子どもが発達していく段階で徐々に別れていくべきものだと思いますが、2、3歳児の段階では明確には分けられないでしょう。手を洗うにしても、水を使うおもしろさや、石鹸で遊ぶといった要素がかなりあるわけですよ。ですから、これは生活・仕事、次が遊びと単純に分離できない。そのあたりをていねいとらえていくことのできる構造論でなければなりません。」また、彼は次のように言う。「もしこれから保育構造論を作っていくとすれば、遊びと仕事についても、遊びの課題が仕事の課題になっていたり、分けられない部分や行ったり来たりする部分もあるという、そのあたりをきめ細かくだしていかなければならないでしょう。」

さらに今一つは、子どもの育ちについてとらえることのできる構造論にするということである。例えば、吉村は次のように言う。「子どもがそこで何を経験し、どういうことに気づいているかをとらえていくと、……保育者自身が子どもの具体的な姿を見ながら、一人ひとりの活動がそれぞれにどう位置づ

いているのかを見るといった、小さな構造論とでもいうようなものを作っていきの必要性があると思うのです。」また、藤野も次のように述べる。「子どもの、いまでなければできないことが明らかにされたり、創造的活動の中での自己学習の仕組みがわかったり、育ちの基本としての人とのかつながりといったものの意味が見えてくるような構造があるといいと思います。」

これらを踏まえると、森上が次の主張を行うことは納得できる。「もし、これから保育の構造を考えるとすれば、枠としての構造ではなく、…具体的な個々の子どもがイメージされ、その育ちの複雑なネットワークが見えてくるものでなければいけないでしょう。しかも柔軟なものである必要があります。」

最後は、保育者の受けとめ方にかかわることである。吉村は、「これまでのいろいろな構造論も、それを受けとめる保育者の一般的な資質といったものを考えますと、有効にはなりにくいというか、なじみにくいと言えるのではないのでしょうか。私自身、かつて保育者であったわけですが、どうも構造論のような理論的なものの現場の受けとめ方に問題があるように思います。」と述べる。また、森上も「構造論と保育者の関係を考えていかなければならない部分はたしかにあると思います。」と述べる。両者とも、保育者の受けとめ方を考慮することの重要性を指摘していると言ってよい。

また、保育者による保育構造論の活用に関連する次のような重要な議論がある。吉村は、「たとえ森上先生がとても柔軟な構造論を作られたとしても、運用していく保育者がそれを十分に活用していくためには、プラスアルファといったものが求められるでしょう」と指摘する。そして、長い現場での実践経験を振り返り、「プラスアルファというのは保育者なりに違ってくるし、同じ保育者でも年齢やその時の考え方で変わってくるのが自然だと思います」と主張する。吉村には「保育は人間が生きていくためにどのような経験でなければならないのか、どういう内容でなければならないのか、を考えていくことが、乳幼児の生活経験の組み立てになっていく」と述べている部分があり、人間が生きていくために求められる経験のあり方についての考え方もこのプラスアルファに含まれると考えられる。したがって、彼女は「すべての人が納得するような構造論を望むのはおかしいでしょう」と述べる。藤野も、「構造論というのは組み立てだから、自分で考えながら何度も組み直してみることでできるようなものであるといいわけですね」と述べ、「自分の保育を変えていく方向性がわかるようなものがあるといい」と願

う。そして、二人の見解を踏まえて、森上も「できたものが大事なのではなく、作るプロセスが大事ですね。それを経験していれば、常に作り変え、変化させていけると思います。」と主張する。つまり、保育者一人ひとりが、保育構造をとらえ直し続け、その中で自らの保育を変える方向性が分かることが重要ということであろう。

以上の議論をまとめると、次のようにいえよう。保育構造論は、その時の保育実践が保育全体の中でどのような位置にあるのかを各保育者が意識するようになる上で存在意義がある。しかし、保育構造論構築には保育構造論から漏れるものがあることを前提におかなければ、保育実践が硬直したものになる。また、保育において特に何を重視するかについては、生涯とかの長期的視野から考える必要がある。長期的視野から考えると、子どもの生命の躍動感とか子ども同士の相互作用とかを細やかにとらえることができ、子どもの育つプロセスを把握できる保育構造論が求められる。さらにまた、保育者による保育構造論の受けとめ方を考慮したり、保育者の年齢やその時の考え方の違いに応じて保育構造のとらえ方は変わってくるので、保育者自身が保育構造論を作り直すプロセスを重視したりする必要がある。

保育構造論の存在意義については、保育全体の中で今の実践がどう位置づくのかを意識できることにつながり、保育者の指導性の矮小化や保育者の主体性か子どもの主体性かのどちらか一方を偏重することをとどめることができるであろう。このことで、豊かな指導をより確実に実現できる可能性は高まるであろう。保育構造論の存在意義についての吉村の見解は、光本の主張と共に、妥当ではなからうか。保育者の役割や指導性を明確にすることが重視されている今日において、特に、保育構造論は存在意義があると考えられる。

また、光本は、この議論を踏まえて、保育実践サイクルの各要素ごとに十分に機能する保育構造論を追究することの必要性を主張していると考えられる。この点については、保育構造論から漏れるものを含むことができるようにする方向性で、保育構造論の追究を進めているといえるのではないか。

これに対して、筆者らは、保育構造の追究の仕方については、保育実践構造論と保育内容構造論とでは、その構築のあり方について分けて考察する必要があると考えられる。

この座談会記録でも、両者の場合に分けて考察されていない。前述のまとめた内容から考えると、保育実践構造論を対象にした検討の仕方がなされてい

ると考えられる。したがって、保育実践構造論構築のあり方についての考察は深められているが、保育内容構造論構築のあり方については、意識的な考察がなされていないと考えられる。前述のように、保育内容は、保育者のねらいや指導する事項を意味している場合、保育者側の願いを表すものである以上、その願いを全体として構造化しようとするとき、子どもの相互作用や生命の躍動感や育っていくプロセスの詳細は、理論的に含まれないはずである。この点を踏まえれば、保育内容全体の構造については、クーンのパラダイム論と同様な考え方で、カリキュラム等と共に、基本的考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実現できるかどうかという観点から検討することが重要であると考える。ここで言う「基本的考え方として」ということは、例外を認める、つまり、その保育内容の構造から離れる柔軟さも認めるということである。また、パラダイムは、周知のように、転換が起きることが前提になっている。つまり、作り変えられることが前提である。したがって、パラダイム論と同様な観点に立って保育内容構造論を構築しようとするとき、次の点の検討が必要ということになる。長期的視野から特に何を重視するかが考えられているか。カリキュラム等と共に、基本的考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実現できるか。保育者の受けとめ方が考慮されているか。

4. 保育実践構造論と保育内容構造論の構築に関する基本的考え方

保育実践構造論については、今日、環境を通しての教育が重視されていることを考えると、子どもの生命の躍動感とか子ども同士の相互作用とかをとらえることができ、子どもの育つプロセスを把握できるものが望ましいと筆者らも考える。また、基本的な見方として理解し、例外も認めるという考え方は必要であろう。さらに、保育者の受けとめ方を考慮すると共に、保育者が作り変えるものという点も重要であろう。森上らの議論を踏まえながら、パラダイム論と同様な観点を加えて保育実践構造論を構築・活用することが妥当であろう。

保育内容構造論といえるものは現在も研究されているが、保育内容構造論については、長期的視野から保育において特に何を重視するかが考えられており、カリキュラム等と共に基本的考え方として頭に入れておけば、保育者が豊かな指導をより確実に実行できるものを構築する必要がある。また、保育者が作り変えるものという点も重要であろう。

保育者による保育内容構造論の受けとめ方において問題が生じないようにする上で、前掲座談会記録における吉村の考え方が参考になる。長い実践経験をもつ彼女の言葉を次にあげる。「教育とか保育ということになれば、昔から伝わってきている人間の育ちの過程を知って、本当に人間として望ましいと思えるような文化の中で育ててやりたい。しかも、それぞれの家庭環境や生育の歴史を背負っている一人ひとりの子どもに対して、その子に欠けているものを補っていきたいと思うわけです。興味をもつかもたないかの選択は子どもに委ねるとしても、少なくともそういう刺激は与えたいというのが、私たち保育にかかわる者の願いではないでしょうか。」「私はやはりきちんとした骨組み、設計図は必要だと思います。しかし、保育の場面ではその骨組みを子どもに感じさせないものであり、保育者自身も忘れてしまうことがもしかしたらいけばいいのかもしれませんが。自分の中で理論化されていなくても、それができる保育者もいると思います。よくそれを感性とおっしゃる人がいるけれど、それは生まれつきのもではなく、やはり知性というか知識の積み重ねによって支えられているものだと思います。」「構造といった骨組みは、内に秘めておいて、外には表われないものではないでしょうか。」

彼女の考え方を参考に筆者らは、次のように考える。本当に人間として望ましいと思えるような文化の中で育てたいという願いを保育者は心に秘め、考えられる経験を構造化し、それを羅針盤のようなものとするが、実際の保育においては子どもに寄り添っていくことが重要である。このことを実現するためには、保育そのものに関する知識と共に、人間として望ましい文化とか人の育ちの過程とかに関する知識も積み重ね、知性を磨くことが必要である。そうした意識を保育者が持ち、自らの願う経験も考え直しつつ保育内容構造論として構築・再構築していくことが重要である。それが可能になれば、保育者の役割や指導性を明確にする議論も必要なくなり、愛情と共に知性の磨かれた保育者の保育実践が期待できるのではなかろうか。

教育基本法における幼児教育の基本を踏まえれば、人格の完成へと向かう上での基礎形成とはどうあればよいのかについての認識を保育者は深めていかなければならない。その認識については、経験や教養や洞察力が異なれば、違ってくるであろう。しかも、その認識に基づいて、幼児期の経験の中で特に何を重視するか、特に重視すべき経験と他の経験はどう関係するのかは、考察される。そうした意味でも、保育者の願いとその構造化についての追究を

深めることになる保育内容構造論構築は、実践において子どもに寄り添う等の留意事項を踏まえた上ではあるが、今日重視されなければならないと考えられるのである。

注

- 1) 田中まさ子『幼児教育方法史研究』風間書房，1998年，326ページ。
- 2) 光本弥生「『保育構造』論についての一考察」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第46巻第1部，2000年，626-631ページ。
- 3) 田中まさ子，前掲書，326ページ。
- 4) 小川博久「幼児教育の構造」日本教育方法学会編『現代教育方法事典』図書文化社，2004年，133ページ。
- 5) 光本弥生，前掲論文。
- 6) 田中まさ子，前掲書，326ページ。
- 7) 小川博久，前掲書，133ページ。
- 8) 小川博久，前掲書，133ページ。
- 9) 小川博久，前掲書，133ページ。
- 10) 小山優子「幼児教育カリキュラムの史的展開—戦後わが国の『保育構造』論を中心にして—」『島根女子短期大学紀要』第40号，2002年，41-51ページ。
- 11) 藤野敬子・森上史朗・吉村真理子「座談会 構造論は保育実践に役立つのか」『保育研究』第6巻第2号，1985年，7-20ページ。
- 12) 光本弥生，前掲論文，630ページ。
- 13) 光本弥生，前掲論文，630-631ページ。
- 14) T.S.Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, Third Edition, The University of Chicago Press, 1996. (トーマス・クーン 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房，1971年。)